岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Arcadia

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

VOL.36

マルク・シャガール《音楽》
1920年 トレチャコフ美術館

エッセイ
「ユケ、ユケ、リンコンゼファー」

色彩の詩人 シャガール展

特別企画展
三河念仏の源流 ― 高田専修寺と初期真宗

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

ESSAY

「ユケ、ユケ、リンコンゼファー」

館長 芳賀 徹

子どものころに読んで、いまだに忘れられない絵雑誌がいくつかある。フレーベル館が出していた『キンダーブック』と、婦人之友社が出していた『子供之友』だ。

小学校の一年生から三年生の終わりまで、私は山形市の町はずれ、母かたの祖父母の家に二歳下の妹とともにあずけられていた。父は東京の大学の国史学科で、普通よりも八年ぐらい遅れて学生になっていた。東京の高等師範の卒業間際に「赤」くなって退学させられ、その後転向して禅に凝り、ようやく卒業資格を得て山形県の鶴岡中学の日本史教師を数年勤めた上での大学進学だった。母はその父を助けるために東京に出て小学校教師をしていた。

「日支事変」が始まってまもない1938年（昭和13）から41年春まで、私と妹はいわば山形に経済疎開をしていたことになる。

その祖父母の家に上記二種の絵雑誌があったのだ。『キンダーブック』は1927年（昭和2）11月の創刊というが、それが揃っていたわけではない。東京の父母が送ってくれていたのかどうかも定かではない。何冊かが、旧制高校生の叔父と私と一緒の四畳半の勉強部屋においてあって、小学生の私は繰り返し繰り返しそれを眺めていた。ひろげると横長のA3版になるぐらいの大型の雑誌だった。

そのなかの一冊の「ユケ、ユケ、リンコンゼファー」という文字と絵をいまだに憶えている。最新の自動車の特集号だった。クリーム色だったか、銀色だったかの、流線型のオープンカーが広い道を疾走していて、その助手席のハイカラな洋装の女性がスカーフをひらめかせながらこちら向きに手を振っている。そんな絵だった。

小学一、二年の私は心の底から、このような自動車の走る世界に憧れたのではなかったろうか。東京には一度だけ母に連れられて遊びに行ったことがあった。だが、アメリカという国が海のかなたにあるということさえ、当時の私はまだ知らなかったのではなかろうか。そのどこか外国の「リンコンゼファー」というすてきな自動車―「リンコン」がリンカーンのことであり、「ゼファー」はzephyrで、ゼフィロスつまり西風のことだなどと気づいたのは、ずっと後の大学生になってからのことである。

『キンダーブック』には野菜や魚の特集らしいのもあって、若いきれいなお母さんが真白いエプロンをつけて、祖父母の家のとは比べものにならない明るい台所で人参かなにかを切っている絵もあった。子どもの遊びの特集もあって、私が驚いたのは、東京の子どもたちは遊ぶときでも靴下をはいて革靴をはいているということだった。山形の小学生は夏場ははだしにズック靴か下駄、冬場は足袋にゴム長ときまっていた。革靴をはくのは天長節とか明治節、それに卒業式などの儀式の日だけだったのである。

《コドモノクニ》 大正11年7月号 1922年

《子供之友》 昭和2年7月号 1927年

それでも、県立女子師範の附属小学校に通い、家では『キンダーブック』を読んでいるなどというのは、昭和10年代の山形では一番ハイカラな方の少年だったろう。桜んぼの木立ちに囲まれ、林檎林も桃の林もあって、春にはヒヤシンスやチューリップが一面に咲く祖父の屋敷の、あの森閑とした小さな一室で絵本に心を躍らせていた日々が、まことになつかしく思い出される。

『子供之友』は、祖母が叔母たちの少女時代に毎月とっていてくれたものだった。祖母の押入れから古い号を見つけてきては、これも隅から隅まで何回も読んだ。祖母は『婦人之友』の創刊（明治41）まもないころからの熱心な読者で、「友の会」の最古参のメンバーであり、婦人之友社の「家計簿」を毎日まめにつけているという古風質朴な合理主義者だった。婦人之友社の女性記者が、秋田県の生保内（おぼない）セツルメント取材の帰途に山形に寄り、祖母を訪ねてきたついでに豚の子に餌をやる私と妹の写真をとり、小学一年の私が祖母の口述でこれに文章を添えて、『婦人之友』の巻頭に載ったなどということもあった。

『子供之友』には毎号のように村山知義、武井武雄、初山滋などの面白い絵と文章が載っていた。いま思えば実にすぐれたハイカラな児童雑誌で、私はこれによって知らぬまに昭和モダニズムの洗礼を受けていたことになる。いい子の甲子、上太郎、悪い子の丙子、下太郎の教訓のページなど、70年後のいまでも印象に残っている。動物の図柄の紅茶茶碗を甲子上太郎が持っているのを見て、心底からうらやましく思ったこともあった。マネの《笛を吹く少年》の絵が、表紙か扉かを飾っていたのも『子供之友』だ。あれは私が生涯で初めて見た泰西名画であったろう。

初夏には赤い実をつけた桜んぼの畑をわたって郭公の声がよくひびき、初冬には胡桃（くるみ）の大樹の向こうの奥羽山脈にもう雪が光っていた東北の一小都会、その田園牧歌の日々に点綴された『キンダーブック』や『子供之友』のあこがれの絵の数々―それらはいまも私の夢想と郷愁の奥に美しくやさしく漂っている。『講談社の絵本』の昔話と絵に夢中になってゆくのも同じころからだった。

来年、2009年春には、本館企画で「大正・昭和のモダニズム」展が開かれる予定だ。その展覧会で、あの昔の子どものための絵雑誌に再会できるかもしれない。それをいまから楽しみにしている。

REPORT

シャガールの幻の大壁画を求めてロシアへ

学芸員　村松　和明

当館では6月1日から7月13日の会期で、本格的なシャガール展を開催する。私はその出品交渉など調整のために、昨年末に厳寒のロシア、モスクワにあるトレチャコフ美術館（fig.1）へ行ってきた。

fig.1 トレチャコフ美術館正面にて

シャガールは、エコール・ド・パリ（パリ派）の画家として知られるから、どうしてフランスではなく、ロシアなのかと思われる方もいるかもしれない。シャガールは、このロシアの地に生まれ、パリに出て活躍したユダヤ人画家だった。

そもそもエコール・ド・パリという呼び名は、20世紀初頭に各国からパリに集まってきた主にユダヤ人画家を指して使われた蔑称であった。貧困に苦しみ、差別を受けながらも、ユダヤの血に誇りを持ちつつ愛を求めて描き続けたシャガールは、その意味においてもエコール・ド・パリを代表する画家といってよいだろう。

今回の展覧会の中心的な作品は、トレチャコフ美術館が所蔵する《ユダヤ劇場への誘い》（fig.2）である。これはシャガールがユダヤ人の精神とその誇りを込めて描いた横約8メートルにもおよぶ大壁画だ。このような初期の大作の存在など知らないという方も多いことだろう。それはもっともなことで、この作品は不安定なロシアの政情に翻弄され、流転の末、秘蔵されつづけていた「幻の壁画」だったのである。

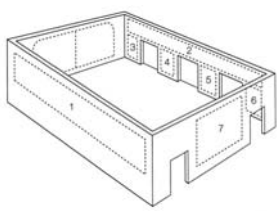
シャガールは1920年11月、国立ユダヤ劇場の室内装飾のデザインを担当することになった。この小劇場の内装を一任された彼は、すべての壁面を一連のカンヴァス画（テンペラ・グアッシュ）で埋めることにした（右下図参照）。劇場に入って左側の長壁全面には、8メートルにもおよぶ《ユダヤ劇場への誘い》を、その反対側の右手の壁には《音楽》(表紙)《舞踏》《演劇》《文学》の4点を並べた。その上に帯状の《婚礼の祝宴》を乗せ、入口の壁には《舞台上の愛》を掛けた。この小劇場は「シャガールの箱」と呼ばれ、大きな話題となった。しかし、この一連の壁画は、政情に翻弄されつづけた。1924年にユダヤ劇場移転にともない設置場所が変更され、1937年にはスターリンの独裁政権がユダヤ人の演劇を標的としたため、この壁画は舞台の下に隠されることになった。そして1950年になってようやくトレチャコフ美術館に収蔵されることになったが未公開のまま封印されたのであった。シャガールがトレチャコフ美術館でこの壁画と再会できたのは、実に制作から50年あまり経った1973年のことであった。そして1991年のソ連崩壊にともない、スイス、フランクフルト、ニューヨーク、ロンドン、京都、アムステルダムなどで公開された。

今回、トレチャコフ美術館の特別の協力を得て、岡崎で公開できる貴重な機会を得ることができたことは実にありがたいことだ。企画部長のタチアナ氏には好意的にしていただき、この壁画について詳しいお話をしていただいたが、それは同時に、この作品がロシアにおいて、いかに重要で意味のあるものかということを実感するものであった。ストックヤードでは、修復部の学芸員とともに大壁画輸送のためのクレート（fig.3）を確認し、収蔵庫では、作品の取り扱いについての注意事項について詳細に打ち合わせもした。当館の活動と設備について説明したところ、展覧会や研究活動、作品保護のための設備が充実していることを高く評価してくださり、出品の承諾もいただくことができた。あとはこの壮大な幻の壁画が、岡崎市美術博物館まで無事に到着してくれることを願って待つのみである。

fig.3 壁画輸送のためのクレート

私はこの展覧会で、7点の壁画作品を使って、1920年当時の国立ユダヤ劇場の室内の様子が再現できれば素晴らしいものになるのではないかと考えている。かつてモスクワの地で光彩を放ち、人々の心を動かした「シャガールの箱」の空間が、90年の歳月を経て、この岡崎の地で再現されることは、私自身今から楽しみでならない。

fig.2 《ユダヤ劇場への誘い》1920年（横約8m） トレチャコフ美術館



ユダヤ劇場復元図

1.「ユダヤ劇場への誘い」
2.「婚礼の祝宴」
3.「音楽」
4.「舞踏」
5.「演劇」
6.「文学」
7.「舞台上の愛」

EXHIBITION

なぜ恋人たちは空を飛ぶ

色彩の詩人 シャガール展

会期　平成20年6月1日(日)～7月13日(日)

学芸員　村松　和明

今回のシャガール展に出品される大壁画《ユダヤ劇場への誘い》（p3参照）は、シャガールの知られざる初期の傑作である。それに対して初期の代表作として知られるタブローといえば《街の上で》（fig.1）であろう。

fig.1　《街の上で》 1914-18 年　トレチャコフ美術館

1914年にシャガールはベラと再会し、翌年に結婚、出会いから6年越しの恋を実らせた。彼女は画家にとって最良の伴侶で理解者、まさにミューズであった。二人が抱き合い空を飛ぶこのタブローの光景は、幸福感と愛の美しさに満ちあふれている。

この二人は、あたかも愛の力で重力さえも超え、現実の世界から切り離されてしまったかのように浮遊している。しかし、空を飛んでいるのは、このような恋人たちに限ってはいない。たとえば《ヴィテブスクの街の上・下絵》（fig.2）では巨大な老人が空をさまよい、《雨・習作》（fig.3）においては動物さえも空高く舞い上がる。空を飛ぶための原動力は、なにも男女の愛の力だけではなさそうだ。

では、シャガールの絵画を特徴づけるこの「浮遊感」はどこからきているのか。また、画面を構成する人物や動物、物体や風景などの不思議な組み合わせはいったい何を意味し、どこから生まれてくるのか。それらは単に画家の幻想だったのか。

シャガールは自伝『わが回想』（1922年脱稿）のなかで以下のように述べた。

> 私を幻想的（ファンタスティック）と呼ばないでほしい。反対に私は現実主義者（レアリスト）なのだ。私は大地を愛している*1。

「幻想的」ではなく「現実主義」という言葉は暗示的である。シャガールの絵画が、幻想的に見えながらも―とりわけ初期絵画は―不思議にも深遠な強さを持っているのは、画家自身が語るように「現実主義」というところに起因しているのではないか。

ロシアの地とユダヤの血

シャガールは旧白ロシア・ヴィテブスクの町外れ、労働者階級地区の田舎町に、ユダヤ人家庭の長男として生まれた。

彼の絵画によく登場するモティーフ、たとえば、家族、大地、家、牛、鶏、結婚、教会（シナゴーク）、ヴァイオリン弾き、乳しぼりの女、時計、司祭、葬式と死などは、どれも彼が幼少年時代に見たり体験したりしたものばかりであった。

つまり、シャガールの98年に及ぶ長い生涯の最初の十数年間の記憶が、その創作の原点となったといえる。彼の絵画には、ユダヤ教会などの宗教的題材もしばしば登場するが、それはユダヤ人として生活した、彼の宗教的な記憶につながっている。

シャガールの祖父と父は、ユダヤ教ハシェド派の熱心な信者で、とりわけ祖父はハシディスムの主唱者として知られた人物であった。ハシェド派は、正統派ユダヤ教のように理性主義ではなく、神との直観的な交流を重んじた。「ハシェド」とは、ヘブライ語で「恩寵」の意であり、この世に存在するどんなに些細なものにでも、神の恩寵が届いていると考えられた。

シャガールの生涯を貫く、人間への大いなる愛、反知識主義、動物への共感などは、彼が生まれ育った故郷と自身の生活に深く結びついた宗教的な背景によって生みだされたものであった。

シャガールの最初の研究者の一人とされるアブラハム・エフロスは以下のように述べた。

> 幼年時代とハシディスム、それは空想に次ぐ空想の世界。そこにはシャガールの幻想のはかりしれぬ源泉がある*2。

このように、シャガールの絵画における本質的な部分は、「ロシアの地とユダヤの血」に密接に関連しているものといえる。

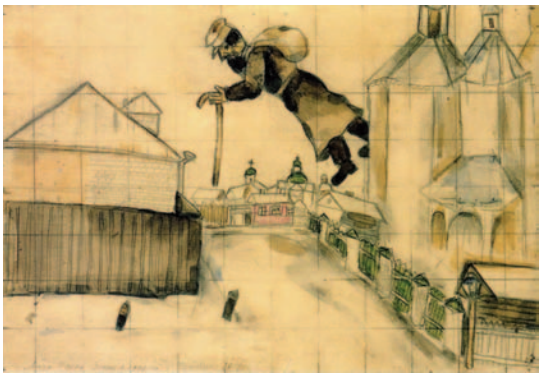


fig.2　《ヴィテブスクの街の上・下絵》 1914 年 トレチャコフ美術館

fig.3　《雨・習作》 1911 年　トレチャコフ美術館

スヴァンツェヴァ学校で学んだ前衛精神

1907年、20歳になったシャガールは、ユダヤ人であるがゆえにペテルブルグの帝国アカデミーには入学できず、帝国芸術保護協会の美術学校に学んだ。しかし彼は、ここでのアカデミックな教育には満足できず、1909年、舞台装飾家で前衛画家のレオン・バクストが教鞭をとっていたスヴァンツェヴァ学校に通うようになる。この学校はシャガールが、「ヨーロッパの息吹が活気づいている唯一の学校」*3と形容したように、自由で前衛的な気風があった。ここでは、バクストが絵画を、ムスチスラフ・ドブジンスキーが素描を教えており、2人は、芸術団体「芸術世界（ミール・イスクーストヴァ）」の代表的な画家であった。このグループは、表現の自由を提言し、絵画のアカデミックな潮流の陳腐さに闘いを挑む志向を持ち、とりわけ象徴主義やアール・ヌーヴォーに傾倒していた。

fig.5 《すずらん》 1916年　トレチャコフ美術館

fig.6 《時計》 1914年　トレチャコフ美術館

「芸術世界」の指導者アレクサンドル・ベヌアはグループの傾向について以下のように述べた。

> 彼らには独自の幻想の世界への憧れがある。たとえば過去における幻想。おとぎ話に由来する幻想、あるいは象徴的傾向をもった幻想である*4。

このように、象徴主義や幻想的表現を志向するスヴァンツェヴァ学校で前衛的な気風に触れたシャガールは、自己に内在する表現の可能性を見出した。

バクストはとりわけプリミティヴィスム（原始主義）*5に関心をもち、とりわけロシア・イコンを再評価した。なぜならそれは、現実の再現だけではなく、色彩の強調やフォルムの自在な変幻によって、聖なる世界を創りあげた偉大な表現と考えられたからである。

ロシア・イコンによく見られる構図で、たとえば聖像を中心に据えて、周りをその聖人の逸話をもとに時系列に図像を並べる構成（fig.4）は、同一画面内に異質な風景が並ぶことから、空間における違和感とともに、重力を無視してそれぞれの場面が宙に浮いたような感覚も生まれる。さらに、長い時間の経過を一気にその画面に表すことから、時間の流れさえも超越した表現となる。それらが遠近法も考慮されずに画面に現れる「同時性」ともいえるイコンの世界には、後のシャガールの絵画に共通する部分を見出すことができる。実際にシャガールもイコンの表現に強く惹かれ、アレクサンドルⅢ世美術館（現ロシア美術館）にロシア・イコンを見るために足繁く通った。これがシャガールの芸術表現のなかに存する、幻視性やプリミティヴィスム、色彩の強調に対する認識を強くする端緒となったと考えられる。

fig.4　ヤロスラーフ派 《聖ニコラウスのイコン》
17世紀 岡崎市美術博物館

宙に舞い上がる神秘と現実

イコンのなかでは、天使が舞い、キリストが昇天するなど、宗教的な幻想に溢れている。彼はその聖なる大胆な表現と、自身の感覚に根付いていたハシェド派の神秘性を組み合わせて描いた。

シャガールは、自身が感じた宙を舞うような幸福感の確かさや、花束（fig.5）や時計（fig.6）といった身の回りの存在そのものから感じられる不思議な力など、生命から湧き立つような神秘的な感覚をも、現実のものとしてとらえて描こうとした。彼は以下のようにも語っている。

> わたしたちのあらゆる内界世界は現実である。おそらく眼に見える外界以上にずっと現実と思われる*6。

シャガール自身「空想ではなく現実主義」、「魂のレアリスムを描く」と語ったが、それはまさに心に現れた一種の現実的な感覚をとらえようとするものだった。

このようなことから、重力を超えて空を飛ぶという題材は、彼の精神的な側面、宗教的心情、社会的な時代背景などによって、姿を変えながらその後のタブローにくりかえし登場するのである。

《結婚式》 1918年　トレチャコフ美術館

註

*1 マルク・シャガール『わが回想』三輪福松・村上陽通訳　朝日新聞社1985年p.157.引用原文の「レアリスト」を「現実主義者」としたのは筆者による。
*2 Abraham Efros, *Profil*, Moscow, 1930,p.181.
*3 Alexander Benois, “Exposition *Soyouz* Ⅳ”,*Journal Rechi*,19 mars 1910.
*4 プリミティヴ（primitive：原始的、根源的）な美をとらえようとする動き。
*5 シャガールがイコンから受けた影響については以下の考察を参照。
Mira Friedman, “Icon Painting and Russian Popular art as sources of some works by Chagall”,*Journal of Jewish Art*,vol.5,Jerusalem,1978.
*6 *Marc Chagall*, Paris, Musée des Arts Décoratifs,1959,p.348.

EXHIBITION

三河念仏の源流 ―高田専修寺と初期真宗

会期　平成20年4月26日(土)～5月25日(日)

学芸員　浦野　加穂子

岡崎市を中心とする西三河は古来真宗が盛んな地域ですが、その始まりは『三河念仏相承日記』によると康元元年（1256）に親鸞の高弟、真佛・顕智らが矢作薬師寺で行った念仏勧進と、その後三河に滞在した顕智による教化とされています。この真佛や顕智を中心に発展したのが、親鸞を開祖とする、真宗高田派の本山専修寺です。

今年は真佛750年忌及び顕智700年忌にあたります。今回の展覧会では三河初公開となる真佛・顕智の坐像（重文）をはじめ真宗高田派本山専修寺（三重県）や東海地方の真宗寺院の至宝を通して、親鸞と真佛や顕智の事跡をたどるとともに、同時期に三河で発展した様々な門流の活動にも焦点をあて、三河真宗の起源とその後の発展について考えます。

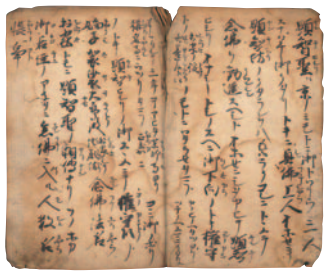
第一章　親鸞聖人の事跡と高田専修寺の成立

真宗の開祖親鸞（1173～1262）は、真佛・顕智の師であり、下野国高田専修寺の起源に深く関わっています。親鸞は承元元年（1207）専修念仏の弾圧により京から越後に配流された後、関東に赴き以後約20年間東国各地で教化に努めました。これにより下野国高田の真佛や顕智、下総国横曾根の性信ら多くの門弟が帰依し、後に各門弟が初期真宗教団を形成していきました。

下野国高田門徒を中心に発展した専修寺は、寺伝では嘉禄2年（1226）下野国高田において親鸞が信濃善光寺の一光三尊仏を感得し、本尊に迎えて創建したとされており、当時善光寺如来や太子信仰がさかんであった関東に、善光寺の勧進聖と共に入った親鸞が、念仏の勧進をしたことが始まりとみられます。この如来堂（後の専修寺）を発展させたのが、親鸞高弟の真佛と顕智です。真佛（1209～1258）は、嘉禄年中（1225～27）関東教化中の親鸞に帰依し、親鸞帰京後も高田の如来堂を中心に関東における有力な門徒集団を作り上げました。また親鸞の数多くの著書を忠実に書写して後世に伝えています。顕智は高田門徒のみならず、親鸞門弟の代表として活躍し、弘長2年（1262）親鸞入滅の際には、葬儀を執り行い、大谷廟堂の建立に尽力しました。そして真佛と顕智の事跡で忘れてはならないのは、三河に真宗をもたらしたということです。

第2章　三河真宗のはじまり

三河真宗の起源について記した史料としては、貞治3年（1364）成立とされる『三河念仏相承日記』があります。本展で紹介する東泉寺（菅生町）所蔵本は、近年の調査により原本もしくは原本に極めて近い古写本と考えられています。本書により著名な上宮寺（上佐々木町）所蔵近世写本において、誤写などにより意味が不明であった記事の解明が進むものと期待されています。



《三河念仏相承日記》　愛知県・東泉寺

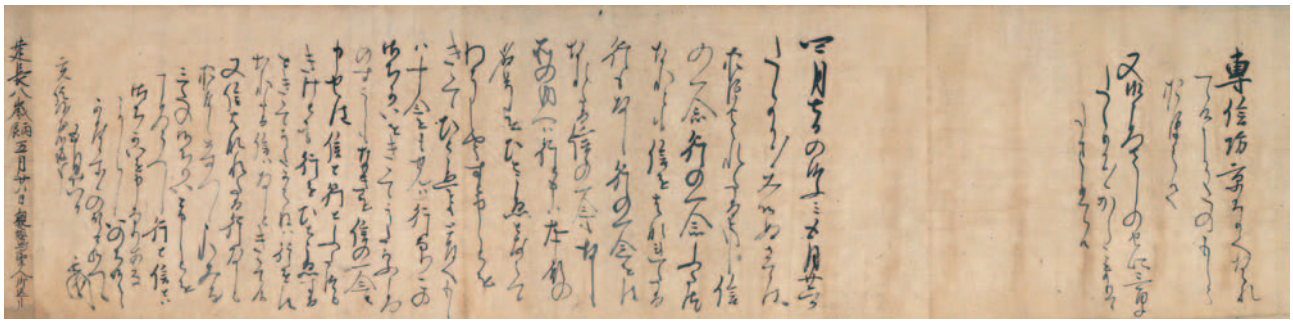
本書によると建長8年（康元元年／1256）真仏、顕智、専信ら4人が、上洛途中に矢作の薬師寺で念仏勧進を行い、また下向の際に顕智が三河の権守殿（出家名円善）の許に滞在して3年にわたり布教した結果、35人が真宗に帰依し、このうち庄司太郎が平田荘に、信願が碧海荘赤渋に各々道場を開き、以後三河各地に真宗が繁昌したとされています。しかし本書だけでは三河真宗の状況は把握しきれません。

14世紀中頃の親鸞の門弟を記した「親鸞聖人門侶交名牒」には、この他にも三河の門流として専信房専海と和田円善の門流が挙げられています。

専海は、真佛・顕智らとともに矢作薬師寺で念仏勧進を行い、また親鸞の主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』の書写を許されました。相伝した親鸞83歳の寿像は、その後三河の願照寺（舳越町）に伝えられたことより「安城の御影」と称され、

《真仏上人坐像》重要文化財　栃木県・専修寺

《顕智上人坐像》重要文化財　栃木県・専修寺



《親鸞聖人消息　専信房宛》　重要文化財　三重県・専修寺

その後西本願寺に寄進されて現在は国宝に指定されています。

円善は、矢作川流域の和田道場を拠点とする和田門徒の祖とされ、「交名牒」では親鸞直弟または専海の弟子とされて三河真宗はすべてその門流と記されています。和田門徒は常陸鹿島、下野高田と並ぶ地方門徒の柱として親鸞廟所の管理をめぐる争い（唯善事件）などで活躍し、またその門流は北陸に伝わり、越前真宗の端緒となりました。信願が開いた赤渋道場が勝鬘寺（針崎町）の始まりとされ、本證寺（安城市）も和田門徒の流れを汲むとされています。

平田道場の系譜を引く妙源寺（大和町）は、正和３年（1314）には太子堂として寺基を確立しており、親鸞筆十字名号や鎌倉時代に遡る光明本尊、絵伝など多様な文化財を所蔵していることから、三河門徒の中心寺院であったことがわかります。

円善系とは異なる法系を伝える寺院に、満性寺があります。親鸞直弟で武蔵国荒木（埼玉県）を拠点とした光信房源海の門弟了専は、鋳物師の弟と共に河内国から聖徳太子像と阿弥陀経を携えて来住したと伝えられており、「わたり」と称された各地を移動する商工業者が真宗門徒になっていた好例とみられます。荒木門徒系の寺院には、源海の直系とされる如意寺（豊田市）、西蓮寺（安城市）、近世において満性寺・妙源寺と共に高田派三河三か寺と称された聖眼寺（豊橋市）などがあります。

このように三河の初期真宗においては、多様な門流が各地に展開していましたが、その後親鸞の曾孫覚如により大谷廟堂を本山化する動きが始まると、三河真宗は関東特に高田系と本願寺系、および荒木系へまとまっていきました。高田の真佛・顕智を三河真宗の起源に位置づける「相承日記」は、この様な状況を背景として成立したとみられます。

第３章　三河真宗の動向と高田専修寺の発展

三河真宗においては、高田派を中心に関東系の勢力が優勢でした。その中で15世紀半ばに登場したのが、専修寺10世真慧（1434～1512）と本願寺8世蓮如（1415～1499）です。真慧は長禄3年（1459）加賀、越前、近江、伊勢に布教し、東海北陸地方の拠点として、寺伝では寛正6年（1465）頃に伊勢一身田に無量寿院を建立したとされています。一方蓮如は名号本尊と御文（御文章）を下付し、本願寺門徒の拡大を図りました。真慧と蓮如の関係は当初は友好的でしたが、蓮如が北陸・三河などで高田門徒の取り込みを進めたことを機に袂を別ちました。寛正2年（1461）上宮寺如光へ名号本尊を下付したことに始まる三河寺院との関係は、応仁２年（1468）蓮如が三河へ下向したことにより深められ、上宮寺、勝鬘寺、本證寺を中心とする本願寺教団が勢力を増していきました。これに対し真慧は、関東系門流の再編成を進め、三河では妙源寺、満性寺が高田派となりました。真慧は野袈裟など独自の教化を進める一方、皇室、武家との接近を図り、文明10年（1478）専修寺は皇室の祈願所となりました。真慧の没後、実子応真と養子真智との争いが、派内を二分する争いに発展しましたが、12世堯慧が一身田に入寺して教団の統一に務め、以後名実ともに高田派の本山として定着していきました。

《野袈裟》真慧筆
津市指定文化財　三重県・久善寺

第４章　真宗寺院の至宝

真宗の信仰のもとに生み出された文化として、道場の本尊として礼拝された阿弥陀如来の名号や絵像（方便法身尊像）、初期真宗で用いられた六字・九字・十字の三名号とインド・中国・日本の先徳高僧連坐像を１幅にまとめた光明本尊、本山との繋がりを示すものとして下付された親鸞ほか各門主の御影（肖像画）などがあります。この他、三河地域の特色ある真宗文化として、仏教伝来から親鸞に至る真宗の歴史を示す善光寺、聖徳太子、法然上人、親鸞聖人の四絵伝があり、道場に掲げて内容の絵解きが行われ、真宗の布教に大きな役割を果たしました。また親鸞が聖徳太子を崇拝したことから、真宗寺院では様々な聖徳太子像が礼拝されました。

本展が、三河真宗の信仰と文化に対する理解を深めて頂く機会となれば幸いです。

《親鸞聖人絵伝》
重要文化財　愛知県・妙源寺

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2008年4月26日(土)～5月25日(日)

三河念仏の源流 ―高田専修寺と初期真宗―

三河真宗のはじまりに重要な役割を果たした真佛(しんぶつ)と顕智(けんち)は、親鸞の高弟であり、今年は真佛750年忌及び顕智700年忌にあたります。本展では三河初公開となる真佛・顕智坐像(重要文化財)をはじめ、親鸞を開祖とする真宗高田派の本山、専修寺（三重県）や東海地方の真宗寺院に伝わる至宝の数々を一堂に公開し、親鸞及び真佛・顕智をはじめとする三河初期真宗の高僧たちの事跡と三河真宗の源流を探ります。

2008年6月1日(日)～7月13日(日)

色彩の詩人 シャガール展

シャガールは1887年に白ロシアのユダヤ人一家の長男として生まれました。彼は20世紀激動の時代、ナチスによる迫害などの悲惨な現実を見据えながらも、夢と幻想の世界を詩情豊かに描き続けました。本展では、モスクワの国立トレチャコフ美術館の特別な協力を得て、幻の大作《ユダヤ劇場壁画》をはじめとする代表作を中心に、シャガールの芸術表現の本質に迫ります。

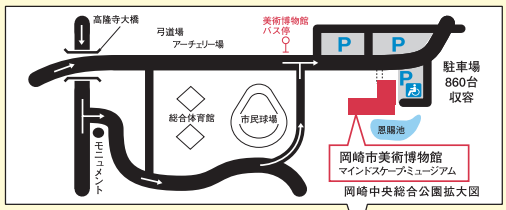
サタデー・ナイト・シアター

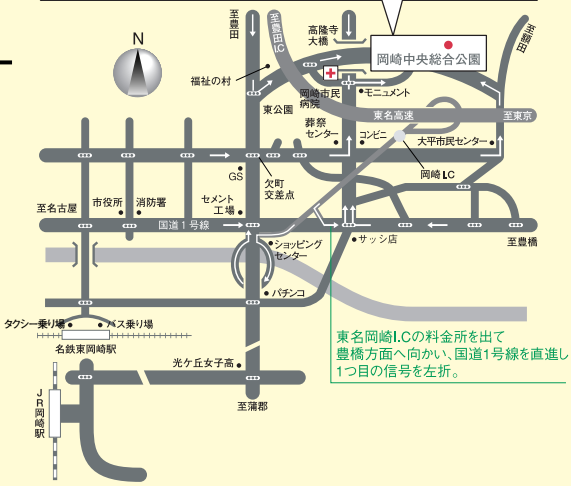
毎年恒例の無料映画上映会を開催します。今年はSF映画特集です。
6～9月の第2土曜日・午後6時～　鑑賞無料　先着70名　当館セミナールーム

●開館時間／午前10時～午後5時（4・5月）
午前10時～午後6時（6月～9月）
午前10時～午後7時（7月12・13日）
〈入館は閉館時間の30分前まで〉

●休 館 日／毎週月曜日（祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日）
年末年始（12月28日～1月3日）
※展示替えのため臨時休館することがあります。

◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②から25分、（名鉄バス）「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
◎タ ク シ ー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
◎自 家 用 車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分





OKAZAKI CITY MUSEUM

Arcadia

【岡崎市美博ニュース／アルカディア】
●Arcadia 第36号 ●2008年4月発行 ●編集・発行 岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）

岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000（代表）
ホームページ http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html

古紙パルプ配合再生紙使用
PRINTED WITH SOY INK